

## 大学放浪記 (1)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

これまで採用頂き、働き場所とその機会を頂いたタイの大学での、いろいろな経験談を、厚かましくも貢献とか、居候生活などと題して記事を寄稿してきた。今回からお世話になった大学の事に限らず、渡り歩いた大学での経験談を入り混ぜて読んで頂く人のために役立つ情報を入れることにした。

2019年の暮れに日本に一時帰国し、翌年1月初めにタイに戻ったがコロナ禍は収まるどころか、何時までも蒸し返し、波状攻撃の如くその襲来にひたすら我慢の毎日を余儀なくされた。収まったかと思うときに新たな変異株が出てきて、その対応に今も悩まされている。お世話になっている大学では学部長の任期2期8年の満了とともに筆者のその大学を去る時期も近づいてきていた。予めこうした情報を得ていたので、それなりの積もりで居たが、自分一人では動きようがない。筆者を招聘して頂いた元学部長であり、副学長でもあった人のお世話に全面的に頼るしかなかったが、こちらからお願いをする前にめぼしい就職先に渡りを伝えて頂いて居た。タイの大学での転職はなかなか難しく、一般には筆者の場合と比較してかなり難しいと認識して居る。

他の人と異な筆者の場合、比較的円滑にそれが可能であったのはこれまでの親交と「長」の座に座る人物との人間関係、特に長期に積み重ねた相互信頼に他ならない。最初は1科目の講義を担当するだけの負担であったが、その後学部長アドバイザー、研究業務センターのアドバイザーなど負担が増えるとともに大学レベルの催しや、他学部の学部長、附属施設の施設長など、それ相当の身分の人との人脈も広がった。外部からの来客があったときなどへの学長室への出入りもかなり頻繁になり、やりがいも感じるようになった。しかし学内の派閥が絡む政治的なコンフリクト（争い、**Conflict**）などが影響して、急遽お払い箱になるという場合も経験した。自らの上司にあたるセンター長が、筆者の出張中に解任になって驚いて居るとその2週間もしないうちに筆者も解任と言う事になった。まさに「寝耳に水」と言う形で後を追われることになった。一時的に学部長も復帰を支援為て頂いたかには見えたが、裏ではその様な話になっていたかは、疑えば切りが無い。しかし任命権がある側の権力が有無を言わず解任に持ってくるから、被雇用側は全くの無力であり、素直に身を引く以外に道は無い。定年退職をして雇用された年長者と言えど、雇用側と被雇用側とではその立場は圧倒的に異なる。学部長のみならず、学部長補佐もそれなりに権限を有しており、あまりにも無能な人間がその場に座るととんでもないことが起きる。学長補佐にも3種類ほどのステータスがあり、一番の高位が **Vice Dean** であり、**Associate Dean**, **Assistant Dean** となる。**Vice Dean** は学部長の代理的代表であり、学部長に何かあれば、それに代わる立場にある。**Associate Dean** は専門や役割により任命されるが、自ら判断して

サインをする事が出来る権限を持つ。Assistant Dean にはサインする権限はない。いずれも学部長が任命権を持つ。学部長の判断、意志決定が極めて重要な事は言うまでも無いが、上記3種の身分にある補佐も、若くしてその座に座ると、ときどき問題が生じる。その発端、あるいは原因がどこにあるかと言うと、大半は経験不足、勉強不足に尽きる。いわゆる自分がその任にあるのに何故相談がないのかなど、自らが学ぶ意志が全く無く、自分のメンツが立たないことに腹を立て、顔を潰されたと感じて毛嫌いするところから始まる。たまたまそのポストに任命されたというだけで、自らが専門家だと思い込み、これまでの事業のいきさつや趣旨などに眼もくれず、見よう見まねでやっているだけでは進展はない。しかしそうした人物の元で問題が起きたり、関係が悪くなると「これでもか、これでもか」と攻勢を掛けてくる。そうなるともう Seniority もなければ、社会常識もない。そうした関係が続くと学生への教育にも良い影響は与えない。かといって任命権者に相談しても、解決策は決まって「けんか両成敗」で終わる。任命権者が自らの任命が間違っているという結論には持って行きたくないからである、いわゆる中立的な判断で裁くと言う事にはならない。外国人が現地のタイ人を差し置いて有利な結果を得ると言う事には決してならない。外国人が、しかも被雇用者が雇用側の者に対等な扱いを受けると言うことは決してない。長らく席をおいたチェンマイ大学からコンケン大学への転職にはもう一つ問題があった。それは雇用契約が切れる前にビザの切れる日が来ることである。次の転職先に就職する前にビザが切れると転職できない。その前にタイの国外に出なければオーバーステイで罰金を科せられる。結果として、ビザ延長の手続きをするべく対応頂き、有り難かった。転職に絡むビザ申請延長については、一度その機会を逃し、こじれると最初からの再手続きは煩雑を極めると言う事で、この事に関して暖かい対応を頂いた。所持品をまとめロジスティック用に密閉できる枠を取りつけたピックアップトラックでチェンマイ7から10時間でコンケン大学に到着。向こう1年間の契約に基づく転職となった。タイの大学での雇用契約期間は原則的に1年間で、10数年も居候できたのは在職時の国際交流事業のおかげである。コンケン大学もその国際交流事業を通じて事業振興、推進した大学の一つであり、かつての2人の学長を初め、留学生もいる。しかしコロナ禍で運が悪かったと言えればそれまでだが、教員、職員、学生に逢う機会は全くなかった。講義負担は初めから契約にはなく、国際交流、研究プロジェクト立案・申請と学部・院生への特別講義、と論文閲読指導などが職務であった。しかし筆者が専門とする学科の教職員にも全く会うことはなく、ひたすらかつての留学生とのつきあいのみで終わった。心なしか1年間を無駄に過ごした感すら覚えた。その反面かつての留学生には大変世話になった。マエジョ大学に移籍してからもその協力には感謝の思いで一杯である。聞くところによると、当初から雇用の予定は無かったようである。これまでの筆者との関係を考慮し、特別の配慮を為して頂いたと言う感もなきにしもあらずである。そう考えるとやはり有り難いと感謝するのが礼儀であろうと考えて居る。しかしアパートと大学のオフィスを健康のために歩いて往復するだけの毎日は今までに経験した事の無い異常とも思える経験のひとつであった。い

くらコロナ禍とはいえ、この対応は本当なのかとさえ思えるほどでもあった。1年間の契約とは言え、契約の改定、延長は可能であるから、できれば延長と言う気持ちの有無に拘わらず、2週間毎のBi-weekly reportの提出は欠かせたことはない。またその上に直接顔を逢わせてコミュニケーションを交わし、6ヶ月もしくは9ヶ月ぐらいの時期にプレゼントそれまでの経過、またそこに至る迄の遂行できた事項とできていないもの、あるいは契約が切れるまでの間に成すべき事の確認などをする機会を持つように為てきた。したがって年間50週であるから25回分の報告書が出来上がる訳である。6月にその機会を持ち、PPT資料の準備とプレゼンを行ったが、自分を取り巻く環境は厳しく、コロナ禍で活動らしき活動は殆どできず、残りの3ヶ月のやり残した仕事が遂行できるという見通しもなかった。こちらにその気があっても相手機関も同じようにコロナ禍であるから、特に交渉事に応じてくれるところはない。その気があっても動けないと言うのが実情であった。かといって何もできないのでは、「何もしなかった」という事になる。また契約内容に盛り込まれた事項が全て遂行できたとしても、その契約が改定され延長為れるとは限らない。報酬を払う相手側にその余力と雇用を必要とする強い意志がなければ延長とはならない。関係学部長を含めたプレゼンでは、当初からそれに見合うポストはなかったが、説得して採用に踏み切ったこと、コロナ禍でその状況以上の事態の変化が期待できないこと、などから、「コロナ禍が終わってからまた来くれ」等という慰めとも思える言葉も出たので、「事情はともあれ雇用側に雇用に対する強い意志がないこと、また同じ状況での孤独(?)な生活勤務状況を続ける事への疑問も働き、それ以上は言わなかった。そのプレゼンの中で、相手側から出た言葉(?)に、一度副学長に会って見てくれないか?と言うのがあった。かといって就任以来、かつての旧知の知人に逢う以外は全くその機会は無く、それも1~2回と言う程度であったから、誰が副学長かも存じ上げていないと答えると、ではその機会を作ろうと言う事であったが、その後連絡はなく立ち切れとなってその大学を離れることにした。正直今頃になって、その様な話が出るとは予想もしなかった。なぜならこのレベルの話は日頃から会う機会があれば当たり前の様に出てくる内容の話しであるからで、わざわざ機会を創って会うような大それたものではないからで、いささか拍子抜けで、考えて居る次元が違うのではないかとさえ感じた。良い経験にはなったが、正直活力のなさに失望したと言う気持ちが大半を占めた。プレゼン以降残りの期間をどの様に過ごすか、もちろん何もしないで良い訳がない。しかしその後はどうするかと言う事が頭をよぎる。お世話になったかつての知人に情報を入れ報告に代えた。そして大学を離れる10日ほど前になって、契約の終了日とビザの滞在期間が同日であることから、早めに次の転職先に出向いて労働許可、とビザ延長の手続きをする必要があった。しかしビザ延長には勤務先機関との契約切れが必要で、一職ある間にもう一つの働き場所(機関)があるのはおかしい、ということで期限切れの1日前に離職(契約終了)、次なる相手機関からの労働許可を提出してもらっても自動的に審査に1日はかかる。するとビザは切れ不法滞在となり、1日5000パーツの罰金を科せられる。一時的なビザ取得を別のプロジェクトでつなぎ2週間ほどの

延長認可を経て、荷物をまとめて正式に離職となったが、契約期間が一日減った分報酬（給料）もその分だけ減らされる。1日1500パーツと記憶する。言うまでも無く、同じ大学の期間延長であればこうした手続きの必要は無いが、延長が認められず転職、再就職の必要性が生じたときにこの問題が生じる。いろいろ考えて居る時間はない。言われるがままに支払いに応じて、荷物の運搬、移動車両への積み込みに協力して頂いたスタッフに見送られ大学を後に為た。翌朝早くかつての留学生が見送りと確認にアパートまで駆けつけてくれてコンケンでの1年間の滞在に終止符を打った。つぎなる転職先機関からの書類の作成整備が終わるまで1週間余のチェンマイでの滞在が必要であった。知人は快く宿を提供為てくれて食事付きのホテル住まいで歓待してくれた。実を言えば転職先も積極的に、また親身になって探し交渉してくれた。最も信頼できる人の一人である。また単に就職先と言うだけではなく、少しでも条件の良い信頼できる相手機関を探してくれている。感謝に堪えない。それとは裏腹に「では昨年1年は何だったのか」とついには愚痴も出たりする。でも働く機会があるだけでも感謝すべきで、何と言う低レベルのことを言うのかともう一つの自分が自身を戒める。

聞くとところによると大学の中には、2つの学部から正にキャッチボールをするかのように学長が交代でその役職に人を送り出していると言う。ある一つの学部から学長の座を長年に亘り独占している大学もあるから、そうした大学に比べれば2学部が独占して交代で学長の座を継続独占している大学があっても不思議ではない。しかし管理運営、大学の教育充実、研究活動に於ける知名度、高い成果が見られていれば、それも納得できるが競争的環境になく、何年後には自分の学部に学長の席が回ってくる。「4, 5年すれば、俺は次期学長だ」とその時期をひたすら待っているという大学の多くでは、若くしてポストを意識し、本文をおろそかにして居る若い世代の姿勢は見苦しい。「いったい毎日何を為ているのか」と疑念すら湧いてくる。これまでもこのシリーズで書いたと記憶するが、タイの大学長に対するイメージは、学長の座に居る人の大半は教授ではなく、助教授であると言ってほぼ間違いない。「管理運営能力に優れておれば教授の身分で無くても問題ではない」と言われると、それ以上に反論する材料はない。しかし、逆に「教授であっても良い」のではないか、と言うのが精一杯というところか。学長の座にある人の圧倒的多数が助教授や助教の身分であると、むしろ教授であることが珍しく、こうした意見を言い出すことが違和感すら覚える。最高学府の学長のポストについて、こうした感覚、認識であれば、学部長やその他の付置研究所などの「長」のポストについてもその感覚が適用される。大学教員の職階はさておき、では本分である管理運営にどれだけの手腕を発揮できるかと言うと、極めて疑問である。「稔るほど頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」とは聞き慣れた諺であり、この諺が如何に現実を物語っているかをあらためて知らされる。管理運営能力に絞ってその手腕、能力を見ていくと、学長と言うポストに座ることが目的で、ステータスを得るのが真の目的である例が99%と言って過言でない。こうした高位のポストについている人の日頃の生活姿勢は、如何にも現状に満足し「どっぷりとその状況に浸っている」と

というのが共通している。自らのメンツを気にし、自分が組織の「長」であり、大学の進展に障碍となっている。上記した「管理運営能力に秀でた」という評価に当てはまる人の姿勢、挙動は、「相手の身分に関係なく、自分の方から問いかける」のが共通点である。知らないから聞くのか、知っていても敢えて確認のために聞くのかはどちらでも良い。「長」としての視点が自分自身の為ではなく、大学と言う公的組織を如何に良くするかと言う事のために貢献すると言う基本的な姿勢が大きく異なる。自らのやるべき事を良く理解して居る。自分の無知さを恥じる気持ちは大事だが、自分の面子を意識すると恥ずかしいが、人の為、組織のためと認識すれば気軽である。無我無欲の精神を持たない人に限って高位のポストへの就任に集中している。同じようなことは何処の組織もドングリの背比べであることを考えるとそれ以上の発展はない。何時に成ればこのような低レベルな考えがなくなるかと言えば如何せん、組織の人間全体の意識レベルの向上以外には無い。悲しい現実である。会って名刺交換を為て、その後あらためてその時に撮った写真を送付しても全くの梨の礫というのでは、「何だ、ちょっと学長になったからと言って威張り腐っている」という噂が蔓延するのも自然であろう。ここが、発展する大学に行くか、希望の持てない衰退の一途を辿る大学に向かうかの思案のインターチェンジである。大学に限らず公的機関に属する者として一考を促したい。やはりそうした人間が育つ背景には教育の影響が大きい。教育の重要性を今更に考えさせられる。